

社会貢献活動と学習活動の融合

—— サービスラーニング論 ——

志々田まなみ*

はじめに

平成8年中央教育審議会第一次答申⁽¹⁾で、変化の激しい社会に対応できる自主性や問題解決能力、豊かな人間性といった、いわゆる「生きる力」の育成が重視され、我が国の教育課題として注目されるようになった。これらに応える教育方法として、近年、社会貢献活動と学習活動とを融合させたサービスラーニング(Service-Learning)と称する学習方法論が注目されている。サービスラーニングの手法を用いた活動は、知識・技術の習得だけではなく、道徳性やコミュニケーション能力の育成が期待できる学習として、多くの国々で注目されている。また、我が国でも、小・中・高等学校での総合的学習の時間や、大学での教員養成系コース、福祉系コースなどの一部で活用されはじめている。

もともとサービスラーニングは、アメリカ高等教育において生起し、現在、初等教育から高等教育までの幅広い教育機関で普及した教育方法論である。そこで、アメリカ合衆国での実践や理論を中心に取り上げ紹介し、新しい教育方法論についての理解を深めたい。

1. サービスラーニングの起源とその発展

サービスラーニングが発達してきた経緯については論者によって多少異なるが、1960年代から70年代のアメリカ高等教育での社会貢献活動の実践のなかから生まれたとする説が有力である⁽²⁾。

アメリカの大学では、「教育機能」と「研究機能」に加え、第三の機能としての「コ

* 広島経済大学経済学部講師

「コミュニティサービス」(大学開放, 社会貢献)が位置づけられている。そこには、大学が有する潤沢な知的資源は、大学や研究者、学生だけに占有されるべきものではなく、広く地域社会の人々にも還元されるべきだという大学開放の理念が存在する。こうしたアメリカ大学のもつ風土がサービスラーニングを生み出したといっただろう。

さらに、これら社会貢献活動は、地域住民のための問題解決に役立っているばかりではなく、参加した学生たちの成長にも大きな効果があることが認められるようになる。大学の講義で習得した知識や技術を道具にしながら、実践的な社会課題に取り組むことを通じて、知識の応用方法や実践力が身につく場合が多いことが注目された。また、地域への諸課題に目を向けて地域住民とともに課題に取り組むことにより、学生たちは自分が地域社会の一員であるという自覚と責任を認識し、シチズンシップや道徳性、社会奉仕の精神が養われることも確認された⁽⁴⁾。

こうした高等教育での教育成果が高く評価され、1980年代後半より、大学だけではなく、初等、中等教育機関においてもこのプログラムが注目されるようになる。さらに、1990年代末からはじまった体験学習を学校教育に取り込もうとする教育改革運動と相まって、サービスラーニングの導入は、一気に教育改革の中核に据えられるようにまでなった。こうしてサービスラーニングは約20年間に、多くの州の公立教育において正規の教育課程に取り込まれ、発展してきた。2001年の時点で、1260万人の児童、生徒がサービスラーニングに参加しているという⁽⁵⁾。

2. サービスラーニングの特徴

1999年、アメリカ連邦教育省がサービスラーニングの定義を発表し、サービスラーニングとは、「コミュニティのニーズに対応したサービス活動と教室内の授業を統合したカリキュラムに基づく学習方法⁽⁶⁾」として、全国的に理解されることとなった。つまり、学習目標や学習プロセス、学習評価法について周到に計画された意図的教育(フォーマルな教育)の学習方法論として用語が統一されたのである。

とはいえ、こうした用語の定義だけでは、それまでの学習方法とサービスラーニングとの間にはどのような違いや特性があるのかわかりにくかった。そこで、高等教育の中でのサービスラーニングの発達経緯に着目し、体験を用いたその他の学習方法との違いを検討することで、サービスラーニングの特性を解説したのが、フルーコ(Fruco, A.)の研究である⁽⁷⁾。

彼は、まず大学において体験を活用した様々な活動事例を、ボランティア活動(volunteerism)、インターンシップ(internship)、コミュニティサービス(community

service), 実地教育 (field education)の5つに整理した。そして、それらの関係性を明示するために2つの指標を設定した。

その一つが、サービスと学習のどちらに重点がおかれたものであるのかその度合いであり、もう一つが、その活動が誰のために行われているのか(beneficiary), すなわち、活動を受け入れる者や機関のためのものか、それとも活動を提供する者や機関のためのものなのかというその度合いである。この2点を視点とした5つの体験学習の関係性を示したのが、図1である。

「ボランティア活動」は、サービスを提供することが第一義の目的に据えられ、活動を通して最も恩恵を得るのは、サービスを受ける側の者や施設・機関などであることから、図の左端におかれる。一方、「インターンシップ」は、学生自身の実践的な力量を身につけさせる学習機会として設けられた活動であり、それによって恩恵に与るのは活動に参加した学生側であることから、右端においた。もちろん、ボランティア活動によって学生に教育的な効果がないというわけではなく、インターンシップも学生を受け入れた機関側にもメリットはある。しかしながら、これら二つの活動は、サービスと学習との比重という点では、明らかにどちらか一方へと傾斜している事業であることから、図中の両極に位置づくものとされた。

次に、「コミュニティサービス」では、サービスの提供が活動の第一義ではあるものの、大学や学生はコミュニティで活動することを通じて、新たな学問的発見を促されるという意味で、サービスを受け入れた機関だけに恩恵があるわけではない。それと同様に、「実地教育」の場合も、確かに社会の実践的課題に取り組むための学習活動ではあるものの、そこで取り扱われている内容は、環境問題や社会政策、マ

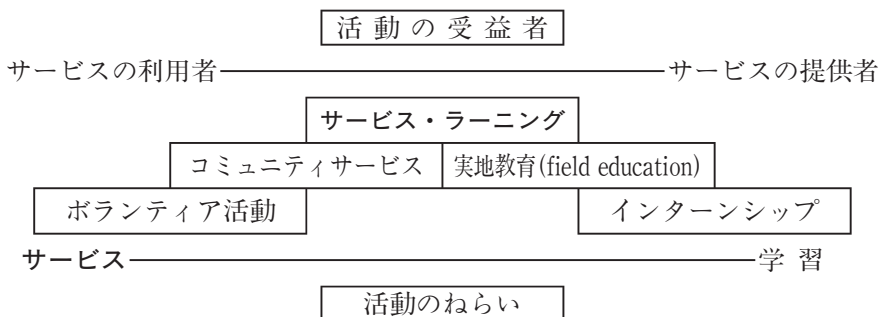


図1 フルーツのサービスラーニング概念

(Furco, A., “Service-learning: a balanced approach to experiential education”, *Expanding Boundaries: Serving and Learning*, Corporation for National Service, 1996, p3より筆者加工・邦訳)

イノリティ問題など、地域課題の克服への応用を企図した学習活動であるという意味で、大学や学生のためだけの活動とはいえない。よって、図中では、サービスラーニングを挟んで左にコミュニティサービスを、右に実地教育を配置している。

まとめにかえて ー学習活動と社会貢献活動の融合のためにー

最後に、今後のサービスラーニングを授業活動に導入するための課題について、2つほど指摘したい。

フルーコがサービスと学習との中間であり、かつサービスによって享受する恩恵の度合いもサービス提供者とサービス利用者の中間、という2つの条件を兼ね備えたものとしてサービスラーニングをとらえたように、この活動は、サービスと学習との「バランスのとれたアプローチ⁽⁸⁾」で進められねばうまく展開しない。つまり、学習によって社会貢献の方法や内容を学び、社会貢献活動の参加によって、さらに知識・技術の必要性、活用法を学習するという、学習活動と社会貢献活動のスパイラルでもって構成される学習モデルが必要になる。多くの実践分析の中からこうした学習モデルの解明をおこなうことが、第一の課題にあげられる。

また、今後円滑にサービスラーニングの実践を行うためには、社会貢献活動に携わる者として、なぜ自分が社会に貢献するのか、その意味を考える授業が行われる必要があるだろう。すでにアメリカ合衆国ではこうした学習が取り組まれている。サービスラーニングの発生過程でもふれたように、サービスラーニングは、学校、研究者、学生それぞれがコミュニティに対して有する社会的使命が原動力となった活動である。社会に対し自分はどのような貢献ができるのか、そしてなぜそれが必要なのかを考えるきっかけ作りとなる授業のあり方についての検討が、第二の課題として指摘できるだろう。

注

- (1) 中央教育審議会『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』1996年、文部省。
- (2) Jacoby, B. and Associates, *Building Partnerships for Service-Learning*, Jossey-Bass, 2003, pp. X I - XVI.
- (3) *Ibid.*
- (4) 渡瀬典子「学校教育への『サービスラーニング』導入の意義ーアメリカにおける研究動向から」, 『日本家庭科教育学会誌』, 45(3), 2002年, pp.255-263.
- (5) Campus Compact, *Highlights and Trends in Student Service Learning and Service-Learning: Campus Compact Annual Service Statistics 2001*, 2001, p.2.

- (6) U.S. Department of Education, "Service-Learning and Community Service in K-12 Public schools", *Statistics in Brief*, 1999.
- (7) Furco, A., "Service Learning: A Balanced Approach to Experiential Education.", *Expanding Boundaries: Service and Learning*, Corporation for National Service, 1996, pp.2-6.
- (8) *Ibid.*,p6.